

図書館は

知のワンダーランドか？ その内側へ

深夜まで図書館に輝くシルエット

マラルメのように、かっこよく、「万巻の書は読まれたり。肉は悲し」と、一度つぶやいてみたい。

まあせめて50冊、いや100冊は読破しなければ。

中央大学の図書館には、たっぷり195万冊の蔵書があるそうだ。

図書館は書物の宝庫である。宝庫は迷路のようでもある。

というわけで、学生記者は中央図書館の内側に、足を踏み入れた。

学生記者取材班

ややこだわりの、＜中央大学中央図書館＞の解剖学——。

「レファレンス」むづい奥義

入館証で図書館に入ると、正面に「2階カウンター」がある。開架図書は、開架にはない中央書庫に所蔵された図書・資料の閲覧・貸出などを受け付けている。おなじみのコーナーだろう。通路をはさんで、その左側に「レファレンス」カウンターがある。ここに立ち寄ったことがありますか？

順番待ちの正面コーナーのにぎわいに比して、左はややひっそりとしている。このとき、相談者は一人。なにか「敷居が高いなあ」と気が引けたりするわけである。

「そんなことないですよ。どうぞ、どうぞ」と高杉さん(閲覧課副課長)

図書館メモ①蔵書数195万冊

正確には、195万1421冊という(2005年度図書館年次報告)。これは中央図書館(約117万冊) + 大学院図書館 + 理工学部分館のトータル蔵書数。図書・資料の年間購入費は約6億1000万円。徳の単位が2ケタの早・慶は別格だが、他の私大では上をいく。

ヒトに訊け

『図書館に訊け!』(井上真琴著)／ちくま新書)という本がある。著者は同志社大学図書館のレファレンス・ライブラリアン。図書館

は、「レファレンス・サービスを競う時代」だそうである。資料探しで困った場合は、図書館の「モノに訊く」と同時に「ヒトに訊け」、レファレンス・サービスを利用しないのは「あまりにももったいない」と。担当者、ホテル客のどんな要求にも対応する「コンシェルジュ」にも喻え、ソクラテスの「魂の産婆術」に擬し

は、「レファレンス・サービスを競う時代」だそうである。資料探しで困った場合は、図書館の「モノに訊く」と同時に「ヒトに訊け」、レファレンス・サービスを利用しないのは「あまりにももったいない」と。担当者、ホテル客のどんな要求にも対応する「コンシェルジュ」にも喻え、ソクラテスの「魂の産婆術」に擬し



テキパキと親切だった

どんな相談があるだろう。相談例を聞いてみた。たとえば、「『キエルケゴール』という本の蔵書データベース「CHOIS」で調べても「ひつかからない」、中大にはないのか」という相談だ。むろん、こんな著名な本がないわけがないのである。

「単純に、『キエルケゴール』と打てばよかったですね。それが日本では一般表記ですからね。確

て「資料の産婆術」とも呼んでいる。そのプロフェッショナルな「秘術」と根性たるや……もう目からウロコの本だった。お薦めですよ。レファレンスは、そんな情報・資料探しをサポートする、じつに親切な窓口なのである。

項調査③参考図書、CD-ROM、オンラインデータベース使用方法の利用案内——となるそうだ。中大ではほかに2人、計4人の館員で対応している。

『キエルケゴール』が「所在不明」

を聞いてみた。

たとえば、「『キエルケゴール』の倫理思想」という本を

探している。中大

の蔵書データベース

「CHOIS」で調

べても「ひつかからない」、中大にはないのか」という相談だ。

むろん、こんな著名な本がないわけがないのである。

「単純に、『キエルケゴール』と打てばよかったですね。それが日本では一般表記ですからね。確

かに翻訳ものを含めて一字違いで探せないこともありますね。電子データの半面の限界です」と高杉さん。

同様に、「ロースクール」と「Law school」、「短大」と「短期大学」、「ワイマール」と「ヴァイマル」など、単純に表記の違いやミスによって検索できないという相談がけっこう多いという。民法関係の文中、カッコ内の引用文献の記載にある「舟橋」意思表示の錯誤」九大十

かに翻訳ものを含めて一字違いで探せないこともありますね。電子データの半面の限界です」と高杉さん。

同様に、「ロースクール」と「Law school」、「短大」と「短期大学」、「ワイマール」と「ヴァイマル」など、単純に表記の違いやミスによって検索できないという相談が

けっこう多いという。民法関係の文中、カッコ内の引用文献の記載にある「舟橋」意思表示の錯誤」九大十

「お宝の「検索ツール」+「レファレンス・ブック」

そこで駆使されるのが、「レファレンス・ツール」と呼ばれる検索エンジンの秘密兵器だ。ざっと並べてみよう。

①全国の大学図書館の図書検索ができる国立情報学研究所の「NACSIS Webcat」

②国立国会図書館蔵書検索システム「NDL-OPAC」

③大半の公共図書館・大学図書館の図書検索システム「WebOPAC」

④雑誌の論文の執筆者や論題のキーワードから検索できる「CNI」など。

周年記念論文集五九五頁以下▽の極小文字を示して、「この論文集を読みたい」という「局的資料」の探索や、巻末参考文献の「松井健」西

南アジアの乳製品とその加工」——

「お宝の「検索ツール」+「レファレンス・ブック」

そこで駆使されるのが、「レファレンス・ツール」と呼ばれる検索エンジンの秘密兵器だ。ざっと並べてみよう。

①全国の大学図書館の図書検索ができる国立情報学研究所の「NACSIS Webcat」

HEALTH DIGEST.5.Food.4」といったどの国の出版物かも不明で、本の探偵が海外に及ぶものも少なくないという。逆に担当者は「プロ意識」が燃え立つものらしく、あの手この手を駆使してそれぞれに「探し当てた」そうだ。

「お宝の「検索ツール」+「レファレンス・ブック」

そこで駆使されるのが、「レファレンス・ツール」と呼ばれる検索エンジンの秘密兵器だ。ざっと並べてみよう。

①全国の大学図書館の図書検索ができる国立情報学研究所の「NACSIS Webcat」

②国立国会図書館蔵書検索システム「NDL-OPAC」

③大半の公共図書館・大学図書館の図書検索システム「WebOPAC」

④雑誌の論文の執筆者や論題のキーワードから検索できる「CNI」など。

周年記念論文集五九五頁以下▽の極小文字を示して、「この論文集を読みたい」という「局的資料」の探索や、巻末参考文献の「松井健」西

南アジアの乳製品とその加工」——

「お宝の「検索ツール」+「レファレンス・ブック」

多彩で便利な検索ツールによって

解決可能なものも多い。無料検索できるのも、自分のパソコンの「お気に入り」に入れておくとも便利ですよ。

事実内容の調査・確認の「事項調査」となると、「ポツダム宣言の全文(日本語)」を探している「キューバ共産党系の新聞(機関紙)HOYの読みと意味は？」など、相談例はさまざま。

前者は、まず「ポツダム宣言」がどの主題分野に属するか検討し、歴史分野、外交問題・多国間条約の資料をあたり、六法全書や日本大百科全書などにもあたりたりしてみよう。

後者は、読みと意味だけがわかればよいから、キューバの公用語であるスペイン語HOYを西和辞典で調べてみる、「新聞(機関紙)」をキーワードに『多文化社会図書館サービスのための世界新聞ガイド』にあたってみる、「キューバ」からキューバやキューバ革命に関する本をあたってみるなど、その方法・アンゲルはさまざまで、館員の経験と腕、

分析力が試される仕事である。

相談カウンター続きに「レファレンス・ルーム」があつて、目録、辞典・事典、便覧、地図、統計、年鑑、図鑑類が和洋主題別に書棚に並んでいる。これも「事柄を調べる」目的に特化された「レファレンス・ブック」である。極意は、電子的な「検索ツール」・プラス・冊子体の「レファレンス・ブック」の両者を駆使することらしい。どの分野には

どんな資料があるか、それに通じているかどうか、が分かれ目になるらしい。

「この資料を活用することが大事ですね。たいていのことは調べられます。この部屋は自由に出入りできるので、十分に活用してください」
目立たない場所なので、こんなところに入出入り自由の宝庫が、という

思い。「敷居が高い」どころの話ではなかった。

かつては、自分で適切に見つけられずにレファレンスを利用する人が多かった。しかし現在のレファレンスは、インターネットの普及によって情報へアクセスする機会が増えたため、情報は入手したもののその信

頼性に不安を覚え、文献上の根拠を求める人や、情報量が多すぎて必要な情報を選び出すことのできない人の「駆け込み寺」になっているという。学部生の相談件数はますますだが、教員や院生ら専門領域の相談も多いうだ。「レファレンスの重要性」を知悉している表れだろう。

例えば、柳美里「石に泳ぐ魚」

記者も手ぶらで出かけたわけではない。

テーマは、柳美里さんの小説「石に泳ぐ魚」。初出は文芸誌「新潮」1994年9月号。モデルの女性が容貌のリアルな描写をめぐり、単行本化の「事前差止」を求める訴えを起し、最高裁は2002年9月、「名誉・プライバシー・名誉感情の侵害」を認め、戦後文学作品では例のない「事前差止め」を命じた。

表現を修正した改訂版『石に泳ぐ魚』(新潮社)が刊行されたのは翌月10月だった。

作者と実在モデルとの関係性や表現のありかたなどをめぐって、さまざまな議論があつた。法的な観点ではなく、文学の表現行為にかかわる論争——文芸誌などでの批評、評論著者インタビュ、手記、新聞・雑誌の関連記事を読んでみたい。それらのリストは手に入るでしょうか、と相談したのである。

「自分ではどこまで調べましたか」と、山田さんにたずねられた。「新聞のデータベースで、過去の報道はチェックしました」

「なるほど。評論関係の資料は？」

「一応インターネットで調べたところ、ウイキペディアにもかなりの数が出ていました。が、もつとあるのでは、と」

「分かりました。では調べてみましょうか」

と言って、パソコンに入力。

「Magazine Plus」という検索ツールである。

一気に40件以上もの資料がプリントアウトされた。こちらで調べた数をゆうに5倍は超えている。検索のワードだけで、さらに広範囲に探したり、絞り込んだりできそうだ。

「Magazine Plus」はその名のとおり雑誌検索に強い検索ツールで、CHOISともリンクしていて中央大学図書館内にその雑誌があるかどうかでも検索できる。

利用者の求める資料の探し方や中央大学にない資料について、国立国会図書館をはじめ、他の大学図書館所蔵の蔵書の文献コピーを送つてもらったり、図書の貸し借りのサービなど図書館間のネットワークもよ

くなつてきている。単独の図書館で刊行される全ての出版物を賄うことはむろん不可能だから、「ここにはないが、××図書館にある」といった図書館どうしの情報共有と相互協力を利用者にとつてもありがたい。

ただし、いくらレファレンスが便利だからといって、頼つてばかりはられない。高杉さんはこう言う。

「社会に出たら自分の力で資料を探し出し、集める能力が求められます。ですから私どもは依頼された図書の所在や事項をただ調査して知らせるだけではなくて、その探し方も一緒に教えることで、大学時代の間に自分の力で資料探索し情報収集ができるように『自立』を支援しています」

図書館は「ゴーマン」?

余談になるが、先の『図書館に訊け!』は、「図書館はゴーマンだ」と口にする人がいる▽と痛快に書き出している。ゴーマンと感じる理由の一つは「すべてが図書館側の論理で仕切られている」困惑、もう一つは文字通り「図書館員の態度がゴーマン」。

中大図書館スタッフはゴーマンとは無縁に、やさしく親切だった、と報告しておきたい。(有路)



新刊リストとの格闘

書名をあげて、「マル」や「チェック」という声飛び交う。購入図書についての、内部的な仕分けの「符丁」らしい。

図書館×モ④コレクションetc

貴重書・コレクションでは、「人性論」で知られる英国の哲学者、D・ヒューム、「最大多数の最大幸福」の功利主義哲学者、J・ベンサムのコレクションが有名。一部は電子化もされている。「A大やB大には国宝級のものがある」C大は建物自体が重要文化財」などと他大学には桁外れの「お宝」もあるらしい。

1979年EC(現EU)資料センターに、94年には「国連寄託図書館」に指定された。国連寄託図書館は都内の大学では中大と東大の2校だけ。中央図書館内の「国際機関資料室」で読める。

机を囲んで、この日は5人の担当者。毎週火曜の朝に開かれる「選書会議」である。

全員の手元には『週刊 新刊全点』に1度といつても、責任者がある程

書籍の年間出版点数は7万6500点(05年・出版科学研究所調べ)にもなるから、週刊案内も相対に分厚い。責任者は、横内さん(図書館



選書基準があるとはいえ、本選びは、眼力も根気もいる作業である

するという。

横内さんが、ページを追いながら、購入の可否・仕分けを読み上げていく。これに、レファレンスなど各セクション担当者からの希望図書を加えていくスタイルをとっている。かなりのスピードで進む。「『新刊案内』」

小説は「書評待ち」

文庫は「全点購入」：

00冊前後選んでいますか

らね」。リストとの格闘でもある。

選書基準はどんなものだろうか。

「基本的に収書方針（中央大学HP

参照）に従って選書しています。学生からの購入希望図書も、これにそって検討しているんです」

学習用参考書でも、あまりにも基本的なものは避けている。また、意外にも断る率が高いのは小説だという。「小説を全部受け入れていたら、大変ですからねえ」。文学作品は、4大新聞と書評専門紙の書評に取りあげられたものを基準に選ぶ。だから、有名な作家の作品でも書評に載らなければ受け入れられないこともある。「担当者の個人的判断が加わらないように、基準を設けているんです」。しかし、概して書評は遅いから、長く「書評待ち」の本も少なくない。この日の会議では、例えば、柳田邦男著『大人が絵本に涙する時』（平凡社）。「一般教養書と思いますが、タイトルに絵本ともあるので、これは書評待ちにしましょう」といったふうに。

人権についての「Q&A」本は「類書がたくさん入っているし、Q&Aの実用書だからパス」。実用書は原則外される。

「時代の変化にとつて学術に含まれる“分野”というものが少しずつ変わってきていますからね、中大の講義で扱うものも当然変化しますし」。

「ジェンダー」という分野が、以前は存在しなかったように。「一年に一度、その年の動向をみるためのリサーチもしている」そうだ。

選書の予算は学習・教育用図書と専門図書に分かれている。「私は中央図書館に置く和図書の担当で、専門図書はというと、大学の先生方の中に委員会が設置しており、そこで検討しているんです。予算を有効に使うためにも、専門図書・学部図書室などとの間で、相互に図書の重複は基本的に避けているという。重複した本は除却・抹消の対象にもなりますからね」と、荒木さん（総務課長）は話す。

年間5万冊

——買う本あれば捨てる本も

購入図書は年間ざっと5万冊。年々それだけ増えると、キャパシ

——どう説明されるんですか？

「大学図書館の本の保存は、5年、10年の問題ではない。貸し出しを目的とした、50年、100年の長期保存なんです。ですから50年先の人も同じように使えるように保存しなくてはならない。そのへんがサイクルの短い公立図書館とも違う大学図書館の特殊性です。図書館はその本が



存続している間は、できる限り大切にしようと思えます。本は、今のものの“ではないから、と言ってお断りしますね。現装保存している各種文学館などを案内したりもしますよ」

公立図書館はカバー付き 大学図書館は「外す」で横並び

1 (左・山崎)対2では、勝ち目がないけれど…

あらかじめ現状を見ておくと、自治体運営の公立図書館にあるのは、ふつうにカバー付きの本である。そのままでは破損、紛失が多いからフィルムなどでカバー・コーティングされている。一方、大学図書館となると……「私の知る限り、どこもカバーは外しているはずですよ。もしあるとしたら、蔵

書数の少ない大学だけでしよう。ただ聞いたことがない」(荒木さん)。

なるほど、事前取材した慶應義塾大学図書館は「(どのキャンパスでも)原則カバーは外しています。ただし、カバーに付いている著者情報部分については切り取り、現物に添付しております。貴重書の場合は原装保存✓としています。この場合の貴重書の定義ですが、国内は江戸時代初期以前、西洋本は17世紀以前の各古写本・古刊本が対象となります」(図書館職員の話)。

上智大学でも「カバーは原則として外しています。ただし、本体にタイトル・著者名がない場合にはブックカバーをかけて残しています。カバーの著者の略歴、内容の概略の貼り付けについても、最近では『WebcatPlus』などで検索すれば本の目次、概要などが読めるので知りたい人はそれを使ってもらえばいいのではないかと、ということをおっしゃいましたね」(図書館経験職員の話)

という回答だった。

長期保存に耐えないコーティング 「文庫本は例外」の理由

どこもそうだとすると、ブが悪い。それを承知で、大学図書館の論理“を聞いてみよう。

——では、今の段階でカバーを残すことは不可能？

「いくつか問題点がありますから、今の段階では……難しいですね」

カバーを残すとすると、出納・コピー・貸し出し返却に耐えうる処置が必要になる。つまりカバーと本体を一体化させる必要があるという。ただ、文庫本に関しては初めの頃はのりでカバーを接着していた。しかし、「のり接着はボロボロになってしまふんですよ」。昭和60年発行の文庫本を見せてもらった。確かに表面が擦れている。使えない、とまではいえないけれど。「のりをつける作業も含めて手間と材料費がかかりました。現在はのりの使用はやめて、文庫本だけはフィルムカバーでコーティングしています」

のり付フィルムカバーを文庫の力

バーの上からさらにかける。公立図書館方式だ。

——でもなぜ文庫本だけに？

「文庫本は壊れやすいので丈夫にするためでもあります。それと、文庫本には上から請求記号のラベルを貼る必要がないんですよ」

単行本の場合、請求記号が書かれたラベルの上からフィルムカバーをしてしまうと、後からラベルを張り替えることが不可能で、表紙自体を除去するしかなくなってしまう。しかし文庫本は、中央大学図書館では岩波文庫や新潮文庫、講談社文庫など、〴〵全点収集している。それで元の本のカバーに書いてある番号を請求記号として管理しているので、ラベルを貼る必要がないのだ。

——単行本のカバーを外す理由はほかにあるんですか？

「ええ。カバーを張ってしまえばカバーの下の絵が見えなくなりやすいね。下は立派な布製だったり、絵が書いてあったりするものもあります。コーティングしてしまうとそれらを見ることができなくなってしまう」

う」

カバーにかかっている帯をどうするかといった問題も出てくるという。

カバーをし
ないことで、
カバーの発
するデザイン
性が失われ
る。しかし
カバーを
することで、
資料本体の
表紙の情報
が失われる。
結局は何か
を犠牲にし
なくてはい
けないのだ。
何を重要視
するか、に
かかっている。

。「大学の本は、〴〵テキスト」として
てみなし、その本の内容・保管を重
視しています」

「一度貼り付けてしまうと元の状
態に戻せなくなったりしてしまうの



皮肉なポスター、でしょ？

で、貴重資料や長期に保存する資料には使用しない——日本図書館協会が編集した「防ぐ技術・治す技術——紙資料保存マニユアル」にもこんなふう
に書かれてい
るのを見せ
てもらった。
フィルム
カバーによ
るコーティ
ングは、50
年ももたな
いという。
「公共の図
書館は廃棄
を前提にし
ているもの
が多いです

が、大学図書館で廃棄を前提として
いるのは雑誌くらいです。最初から
これは廃棄するなんて判断は、どの
本にだってできません。またどの本
のカバーには価値があるなんて判断

は、誰にもできないですよ。第一に、
「長期保存」が前提なんです。本
のシミもその本の歴史ではないしょ
うか、なんて言ったら、「でも今の
時点ではデメリットの方が多いです
からねえ」と返された。

——コストの問題は？

「ありますね。コーティングシー
トは1枚30円—50円もするんです。
また、それを貼る手間もかかる。単
行本なら1冊につきだいたい4、5
分かかかるかな」

時給800円でバイトを雇っても、
1時間に10冊ほどしかコーティング
できない、ということか。

「あ、あとはカバーの厚みの問題
もあります。一冊あたりはたったの
5ミリだとしても、それが大量にな
らば幅もかさむ」。ウム、細かい
話だ。だが無視もできない。

谷川俊太郎「カバーはその人の顔」

「本はテキスト」論を超えて…

以上、それなりに筋の通った断固
たる「カバーは捨てる」論理なのだが、
とすれば図書館下の掲示板にあった

ポスターはなんという皮肉なのだろう。

〈カヴァーノチカラ〉

日本図書設計家協会主催のカヴァーデザイン展（06年11・27―12・2）のポスターだった。

詩人の谷川俊太郎さんが絶妙なメッセージを寄せている。

《本の内容がパーソナリティだとすれば、カヴァーはその人の顔だろう。とすれば目鼻立ちがひとりひと

り違うように、カヴァーも一冊一冊違うのを楽しみたい》

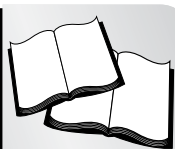
「私も自宅の本にはカバーをつけています。ただ個人の蔵書と大学図書館の蔵書とを同じようにするのはなかなか難しいんです」（荒木さん）、

「一つの考え方として、装丁が本の一部であるような小説や一般教養書のジャンルに限定して（カバーをつける）、という仕分け方はあるかもしれませんね。ただフィルムの保存

性が明らかにならないうちは困難かもしれません」（横内さん）

という言葉は、せめてもの救い、か。「本は自身が読めればいい」はいかにも「実学精神」だが、他の大学がそうならなおさら、「本は文化だ」という見地から、ジャンル限定で

も「中大図書館の本はカバー付き」という「中大モデル」を、先駆けて高らかに発信してもいいのである。……と言ってみたかった。（山崎）



中村昇文学部教授の

「本の虫」の快樂と愉悅

3号館8階。文学部哲学専攻・中村昇教授の研究室のドアを開けると、うず高く積まれた本の山だった。壁も本棚に征服されている。イスの上の一山だけ下に置かせていただいていた……。なんとかさばに近づくことができた。

教授は、授業の冒頭で最近読んだ本の中からお薦めの数冊を紹介する。恒例だから、年間にすると相当な冊

数になるだろう。専門書に限らず、広いジャンルにわたる「本の虫」とならんでのインタビューである。

——中大の図書館にまつわる思い出はありますか？

「大学院生になると、閉架の中央書庫に入れるんですよ。エレベーターで下って、初めて中央書庫に足を踏み入れ膨大な書籍が所蔵されているのを見たときはすごく興奮しました

ね」

閲覧課を通して本を注文するしかない学部生には、「まだ見ぬ宝庫」か。専攻ごとの資料だけでなく原書も充実しているし、と至福の表情でお話しになる。

鹿児島ラ・サール中学↓ラ・サール高校と進んだ。中学1年にして、

太宰に惚れて文学三昧

太宰治の『人間失格』を手にする。「書き出しで一気に惹きこまれましたよ」

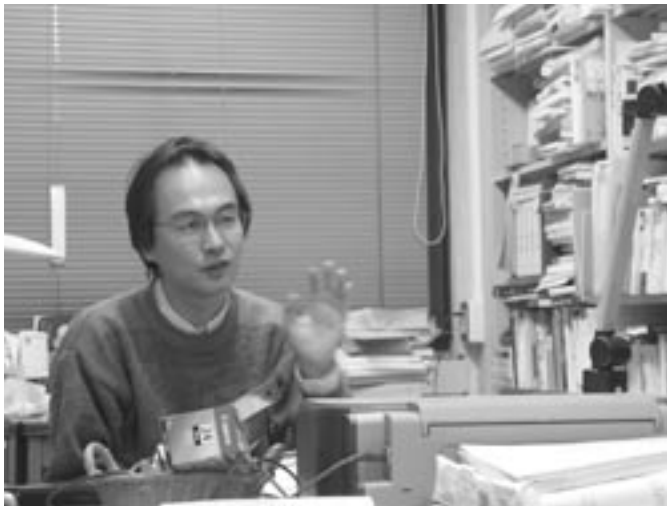
〈私は、その男の写真を三葉、見たことがある。／一葉は、その男の幼年時代、とても言うべきであろうか、……「可愛い坊ちゃんですね」……〉

と続く、あざやかに情景を切り取った有名な書き出しだ。耽読して、太宰なら感想文も原稿用紙10枚は書けるほどだったという。ほかに三島由紀夫や小林秀雄、そして司馬遼太郎も、と広がっていく。剣道部に所属した。これは多分に、吉川英治『宮本武蔵』に感化されたのこらしい。

そのころから、書店を歩き、図書館や古書街にも通い詰めたそうだ。「下宿だったので親の目を気にせず耽ることができたからね」と中村教授は笑う。実家は長崎県。青雲の志で入ったエリート校で文学三昧、早熟な中・高時代である。

南方熊楠の森 80年代の知

天下の進学校とはいえ、ほとんどは理系指向で、「文学部を志す存在



「本の力」を説き語る中村昇教授

家にも本が多いんでしょねえ、と聞いたら、「書齋をはみだして、寝室にもあふれている」それで、「寝返りを打つと上から落ちてくる。ハハハ」。これはアブナイ。「それ

でも引越しのたびに多くを売ってきだし、中学の頃から読んだ本を全部置いておいたらと思うとゾツとしますねえ」
本は買うべきか、借りるべきか。どうなのでしょう。か、先生の場合は。「私の場合は、ナメるように読みたいものは買うことにしていますねえ。それでも異常に高かったり、絶版だったりするときは借りています。だから図書館もよく利用しますよ」

図書館のススメ「散策気分」

ところで、若者の読書離れ。大学生も本を読まなくなると言われる。耳に痛いのだが、中村教授は「うーん」とうなって、大学時代の話。仏文科に入学した当時、周りが渋澤龍彦やランボーを知らずがっかりした経験があるという。「だから、読書離れは今に始まったわけではないの

【学生記者取材班】
山崎綾香Ⅱ法学部3年▽竹下奈穂Ⅱ
経済学部3年▽有路恵Ⅱ法学部3年

(竹下)

は異端だった」という。なかで詩人でもあった現代国語の先生の个性的な授業と指導が「救い」だったそうである。教えを受けつつ、運命の出会いがあった。民俗学というより博

感じてした」

学問の領域の広さとおもしろさ、それを越境する巨大な知性の野太

さ。禁断の思想の森へ踏み入る第1

歩だったようだ。いらいくマガスへの敬愛は今もいつこうに変わらない。

「当時まだ無名だったのに、なぜか

上京して中大時代。当時雑誌『遊

高校の図書館に『南方熊楠全集』全

のエディター、松岡正剛さんが主

10巻が揃っていたんですね。これは

宰する「遊学する土曜日」に参加し

に触れたのも新たな開眼だったらしい。専門

の「西洋現代哲学」へ向かうベースになった

ようでもある（「松岡

基礎研究費が出るが、「新年度に支給

正剛の千夜千冊」はw

されて、2カ月でなくなってしまう

e bで読めるお宝サイ

たりしてね」と苦笑い。

トです）。

「どここの図書館にも特有の『くせ』

というものがあ

といる。書店には

売れ筋の本が置

にはどの本も同

じ立場で並んで

いる。古いもの

が多いように思

える。じっくり開架をみつめること

大きかった。視野がぐーんと広がる

た。そこで80年代的な「知の先端」

に

触れたのも新たな開眼だったらしい。専門

の「西洋現代哲学」へ

向かうベースになった

ようでもある（「松岡

基礎研究費が出るが、「新年度に支給

されて、2カ月でなくなってしまう

たりしてね」と苦笑い。

トです）。

「どここの図書館にも特有の『くせ』

というものがあ

といる。書店には

売れ筋の本が置

にはどの本も同

じ立場で並んで

いる。古いもの

が多いように思

える。じっくり開架をみつめること

だけれど」と言いつつ、温和な表情がやはり曇る。

「一部はよく読んでいるようだが、全般としてはさほど読んでいないように感じますね。町田康などを挙げ

る子もいるけれど、村上春樹や宮部みゆきさえ読んでいないというのはびっくり。軽い落胆、かな」

村上春樹も宮部みゆきも、当然ながら中央図書館にはそろっている。

教授から、図書館の利用のススメ

。

「どここの図書館にも特有の『くせ』

というものがあ

といる。書店には

売れ筋の本が置

にはどの本も同

じ立場で並んで

いる。古いもの

が多いように思